へいちくウォーク　平成28年3月20日

第20回　あかぢ駅～塙石～太祖神社～沈下橋～観音寺～南直方御殿口駅

塙石（ばんせき）

赤地の道傍に巨石が横たわり、往来する人々の妨げになっていた。巨石なので、村人の手では容易に動かすことができなかったが、たまたまここを通りかかった塙（ばん）団右衛門（1567－1615）は、村人からこの話をきき、村人たちの見守る前で巨石を持ち上げて、地蔵堂のそばに移して立ち去ったという。後で、この人が強力の聞こえの高い武将で数々の武勇伝の持ち主だったことがわかり、それ以来この石を誰いうとなく「塙石」（ばんせき）あるいは「団右衛門石」とよび、力石として今もいい伝えられている。

太祖神社

康応元年（１３８９）の創建。祭神はイザナギの命、イザナミの命。康応元年に疫病が流行した時、山上の樹木に」霊光があったので、鉾と弓矢を奉納して祈願したところ悪疫流行が治まったので、神社を創建した。

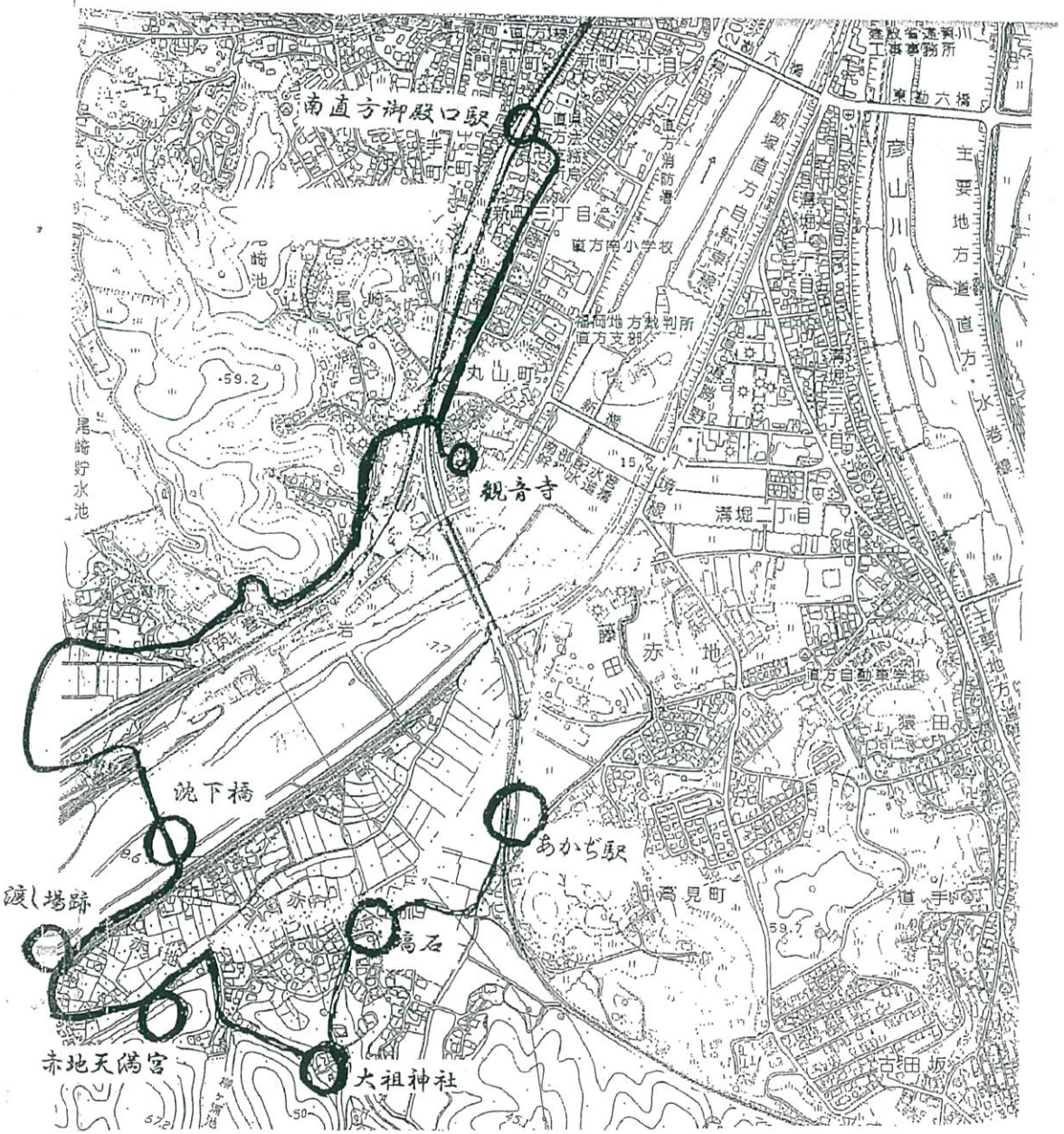
奥の院には岩見重太郎の狒狒（ひひ）退治の伝説が残る。筑前名島城主　小早川隆景の家臣　岩見重太郎が、慶長４年（１５９９）諸国無者修行の途中、この神社に参詣。村人から大狒狒（ひひ）への人身御供で困っていることを聞き、奥の院でこの狒狒（ひひ）を退治したという。

赤地天満宮

菅原道真が築上町椎田の浜辺に上陸して太宰府へ向かう途中、遠賀川の渡しを待つ間に、ここで休憩したので、天満宮を建てて祀ったという。境内の銀杏は胸高回り５・６メートルの大樹で、小竹町では最も大きな銀杏という。

店屋の渡し跡と直方藩廃藩後の長崎街道

直方藩時代、赤地と勝野を結ぶ遠賀川に「店屋の渡し」があった。直方藩が廃藩となった後、長崎街道は感田から日の出橋の所で遠賀川を渡り、古町―殿町―新町を経て勝野に至るコースとなった。



次回は4月17日(日)10時　南直方御殿口駅集合・スタート
直方歳時館～藩主居館跡～多賀神社～庚申社～随専寺～雲心寺～西徳寺～直方駅　等をまわります。

赤地別館（あかぢべっかん）

長崎街道上の赤地(直方市)にあったと伝える福岡藩主の別館のひとつ。別館とは藩主が宿泊や休息・接待・娯楽などのために藩内各地に建てた御殿で、近くでは植木（直方市）・底井野（中間市）にあった。

『筑前国続風土記』に「赤地は直方藩の領地だが、福岡藩主の別館は福岡藩が建てた」とあるがね伝承地もなく、所在地は不明。

店屋の渡し（てんやのわたし）

（1）直方市下境の英彦山川にあった渡し場。今日の境橋のやや下流。

（2）鞍手郡南良津村と赤地村間の遠賀川にあった渡し場。今日の鴻の巣橋の下流。木屋瀬宿と飯塚宿のなかほどに位置する。享保十四年（1729）、将軍家献上の象もこの渡しを筏で渡った。

名の由来は、渡し場に旅人相手の店屋があったことによるという。

岩鼻（いわばな）

直方市尾崎の長崎街道沿いにある。遠賀川に山が迫った難所だったので、享保年間に山道を切り開いて道を作った。今日、鉄道が通過する切通し付近と思われる。踏切の脇に庚申塔などが祀られている。

大田南畝の「小春紀行」文化二年(1805)に（飯塚方面から来ると）「小坂を上り下りて左に人家四五戸あり。岩ばなといふ立場（たてば）なり」

波多野弓子「湯原日記」嘉永元年(1848)には「その夜は鞍手郡の直方町の岩鼻といふ所に泊まる」とある。「立場」とは宿泊を伴わない旅人相手の施設だが、実際には小規模な宿泊施設があったらしい。同じころの「遠鞍紀行」には、岩鼻で芝居がおこなわれたとの記述があり、にぎわいのある場所だったらしい。

丸山観音寺（まるやまかんのんじ）

直方市尾崎丸山にある日蓮宗の寺院で、旧称は丸山の円通堂。平成筑豊鉄道嘉麻川鉄橋そばにある。鉄道の敷設で丘の半ばが削られる以前はもっと大きく、その名のとおり、こんもりとした独立丘であった。今日では、寺が経営する丸山保育園と土用丑の日の頭痛・ボケ封じの行事で知られているが、東蓮寺藩時代からの古い歴史と逸話を持つ寺でもある。

寛永十六年（1639）、初代東連寺藩主黒田高政の命で家老の明石助九郎が城下の長遠寺境内に建立したのが始まり(直方町由来書)という。

また一説には天和二年(1682)六月三日、助九郎が金出(糟屋郡篠栗)から慈覚大師の観音像をもとめ、その妻が長遠寺境内に堂宇を建立したという(直方旧考)。

元禄五年（1692）、長遠寺が山部村に移った時、観音堂は藩が建立料を下賜して現在地に移転した。その後も毎年三月十八日には植木寺中による踊興行があった。「鞍手郡下境村丸山円通堂縁起」には別の伝説もある。本尊の観音像は平安時代の作と伝える。

尾崎口（おさきくち）

直方市新町にある。かつての直方の町の南の出入り口で、城下町時代には「尾崎口御門」があった。門の両側には遠賀川の洪水にそなえて大規模な堤防が二重に築かれていた。現在も堤防跡の一部が道路となって残る。

江戸時代後半は長崎街道がここを通過していため、明治のころまで付近には宿屋が多かった。

香原家の建物（こうはらけ）

「松葉屋」の屋号をもつ商家で、直方市内のに残る、ほとんど唯一の江戸時代の建物。文久三年(1863)の棟札があるが、これは移築したときのものというから、最初の建築年代はこれよりさかのぼる可能性がある。

明治七年に起きた「筑前竹槍一揆」のとき一揆勢いに襲撃され、その時の傷が柱に残っている。

御殿口と御殿口地蔵（ごてんくちじぞう）

新町二丁目付近の地名。城下町の時代、このあたりに町人の居住地と武家屋敷との境界があった。通称「御殿口」は、武家地への入り口との意味でこの名がある。ちかくにある「御殿口地蔵」は創立年代不明で本来の場所から移動しているが、名前はこの故事に由来している。

平成筑豊鉄道の駅名「南直方御殿口」の駅名もこのことにちなんでいる。